
北京の怪物

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

北京の怪物

【Nコード】

N6008D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

北京の街に怪物が出るといふ噂が。それを聞いた学生建国は早速その目で確かめに行くと。実際にこうした話があるかもです。

第一章

北京の怪物

今北京では一つの噂話があがっていた。それは本来共産主義国家では有り得ないことだった。

「嘘だろ!？」

「いや、本当らしい」

市民達は集まればその話をする。誰もがその話を聞いて有り得ないと思いつつも心の何処かで信じていた。

「まさか本当にそんなことが」

「けれど本当らしいんだ」

ここで常に本当であるということが強調される。本当かどうかわからないがこうした噂話の常でいつも本当のことにされてしまうのである。

「見た奴もいる」

「そうなのか」

それを聞くと本当だと思ってしまう。何時でも何処でも噂話とはそういうものである。

「真夜中に道にゴミを捨てると」

「出るのか」

「それもかなりおっかない奴らしいぞ」

彼等は震える声で言う。まるで江戸川乱歩の小説で二十面相の変装が街に出た時のようだがここは北京だ。だがそっくりそのままの感じになっていた。

「口が耳まで裂けていて」

「耳までか」

「風のように速く走って来るらしい」

「こつとも言われる。」

「そしてゴミを捨てた奴を」

「食ってしまうのか」

「そうさ、それも頭からバリバリとな」

どうしてもこうした存在は人を食ってしまふものだ。それも非常識な能力を備えているのだがここでもそれは全く同じであった。しかも姿まで同じようなものだ。

「その場で食ってしまつらしい」

「それで食われた奴は？」

「酔っ払いとか乞食とかが随分やられているらしい」

あくまでらしいであるが。犠牲者が出るとこれまた話に信憑性があるとされる。

「だからだ。いるのは間違いないぞ」

「おっかない話だな」

人々はそう結論付ける。

「この街にそんなのがいるなんて」

「だからだ。夜道には気をつけるよ」

全く別の意味で皆が使う言葉が述べられる。

「いいな」

「そうだな」

市民達はそんな話を家の中でも会社や学校の中でも外でも拳句にはネットでも話をしていた。電話でもそうであるし警官達もまさかと思っていたがどうしようもなかった。噂を消そうにもこれは別に政府が神経を尖らせる類の話ではないしそもそも実際に何かがあるようなのだ。だから彼等もかえって迂闊に動けなかったのだ。

「しかし。本当にいるのかね」

そのうえで皆こうも考える。しかし本当に食べられては元も子もないので実際に試してみようという人間はいなかった。少なくとも今までは。

「いないかも知れないな」

一人位はこう考えるものだが今ここにその一人が出た。彼の名を王建国という。北京のある大学に通う大学生だ。趣味は読書と音楽

鑑賞というごく普通の若者だ。髪は黒く中肉中背である。外見は穏やかでここもごく普通の若者であった。

その彼がこう考えるようになったのは悪意も何もあったのではない。好奇心からだ。だがこの好奇心が曲者だったというわけなのだ。

第二章

いるのかいないのか、それ以上にどんな化け物なのか見てみたい、彼は話を聞くに従ってこう考えるようになった。そしてそれが我慢できなくなってきたのだ。

普段は自制心のある方の彼であるが今回は好奇心の方が勝ってしまった。こうなってはもうどうしようもない。彼は実際にその化け物を見てみることにしたのだった。

「見るのは簡単だな」

それについては何の問題もなかった。

「夜中にゴミを捨てるだけだから」

噂によればそれだけである。しかし問題はその化け物が出てからだ。彼にしる本当に化け物に食べられるつもりはない。それについても考えるのだった。

「まずは、だ」

道教の御札を買った。続いて仏教の御札も。それだけでは飽き足らず何かの本で読んだ大蒜に十字架も買った。これは吸血鬼への対処だがそれでも買ったのだった。

「これでいいな」

「宗教に凝ってるのか？」

そんな彼を見て大学の友人達は変に思った。共産主義国家という建前なのにこんなに宗教に凝って大丈夫かと言いたかったのだ。

「あまりそういうことは」

「ああ、違うさ」

それについては笑って否定する。

「単なる魔除けだから」

「魔除け!？」

「御前の家狐でも出るのか!？」

彼等は魔除けと聞いて今度はこう問うた。中国では昔から狐の話

が多い。特に家に住み込んで怪異を為す話が多い。共産主義とはいえこうしたものを根絶できるわけではないので今もこうした話はある。だからこそ話に出したのである。

「いや、幸いそれは」

「わからないな」

「だったらどうして」

「まあそれに近いものを見に行くつもりだから」

また笑顔で述べるのだった。

「これで銀の十字架を溶かした弾丸でもあれば完璧なんだけれどね」

「おいおい、それは」

「向こうの話だろ」

友人達は呆れながら建国に言った。彼等もそれが何かは知っている。

「ここは中国だぜ」

「狼男は……いたか」

実は中国にも狼が人になる話はある。この国では虎が人になったり人が虎になる話が多いのだが狼が人になる話も存在しているのだ。もつともその性質は欧州の狼男とは幾分異なっているが。当然銀の弾丸が弱点でもない。彼等はそれも知っていた。

「いるけれどそれは」

「ここでは意味がないと思うぞ」

「そうか。じゃあ木の杭も要らないな」

「それ持っていたら捕まるぞ」

「止めておけ」

友人達はそれは止めた。

「警官に何言われるか」

「洒落にならないぞ」

「わかった。じゃあそれは止めておくよ」

「当然だ」

「それにしても」

ここで友人達はあらためて建国に対して問うのだった。彼もあまりもの妙な雰囲気に関わずにはいられなかったのである。

「一体どうしたんだ」

「こんなに急に色々を集めて」

「怪物を見に行くんだ」

彼がにこりと笑って友人達に答えた。

「怪物!？」

「ひよつとしてそれって」

「そのそれさ。夜に出て来るっていう」

彼はその笑みでまた友人達に答えてみせた。

「本当かどうか見ておきたくてね」

「ああ、あれか」

「何か最近言われてるな」

友人達もゴミを捨てると出て来て頭から食べてしまう化け物の話は聞いていた。それでその点については納得して頷くことができた。

「それが本当か見たいんだな」

「そうだよ。別にいいだろう?」

「何があっても知らないぞ」

友人の一人が怪訝な顔で言ってきた。

「本当に出たら」

「出るかね、本当に」

もう一人の友人がその友人に尋ねる。彼は言葉を返してきた。

「出るからそんな話になるんじゃないのか?」

「けれどそれは噂だろう?」

「それが噂かどうか確かめたいんだよ」

建国はここでその友人達に述べるのだった。

「本当なのかどうかね。噂なのかも」

「そうなのか」

「じゃあ頭から食べられてもいいんだな」

「そうならないようにする為に色々集めているんだよ」

その事情も彼等に話す。彼とてそれで命を落とすつもりは全くなかったからだ。

「わかったね。じゃあ今夜にでも」

「やるのか」

「やるさ。吉報を待っててくれよ」

「生きていたらな」

「頑張れよ」

友人達はこう彼にエールを送った。エールを送るだけしかできなかったがこうした話ではそれが精一杯であった。何はともあれ建国は真夜中の北京の街中にいた。様々な宗教の装備で武装している。

その格好は一言で言うと異様であった。

「何かのファッションか？」

「パフォーマンスじゃないの？」

真夜中でも一千万の大都市北京には人はそれなりにいる。彼等は擦れ違う度に建国の今の格好を見て顔を顰めさせていた。御札に十字架に大蒜を山程持ち服のあちこちにお経やら何やら書いた彼の格好は確かに異様そのものであった。

しかし彼はそれについては全く平気であった。むしろ別のものを気にしていた。

第三章

「流石にこれだけやれば大丈夫だよな」

そのことを気にしているのだった。彼は絶対に出て来ると考えていた。だからこそこの今の格好なのだ。そうして誰もいない道までやって来た。

「ここならいいな」

辺りを見回して言う。

「ここで。これを」

持って来た紙屑をポケットから取り出す。それをすぐに道に捨てた。

「さて」

捨ててから少し辺りを見回す。

「何が出て来るかな」

この瞬間が最高に緊張した。怖いがそれと共に何かわくわくするものも感じていた。感じながら辺りを警戒する。何時出るか今出るか、そう思いながら辺りを見回していた。

そうして暫く経ったか。不意に何か影が見えた。夜の薄暗い電灯の光の中にそれが見えた。気のせいかも知れないが確かに見えた。

「来たか!？」

「こら!」

老婆の声だった。建国はその老婆の声を聞いて噂は本当だと確信した。

「化け物、やっぱりいたんだな!」

「誰が化け物なんじゃ!」

ところがすぐに返事が返ってきて。しかもそれは意外なものだった。

「えっ!？」

「道にゴミを捨てるな!罰金だ!」

見れば飛んで来たのは一人の老婆であった。青っぽい服とズボンを着ていて建国の前まで全速力で駆けてきたのであった。老婆とは思えないスピードで。

「罰金！早く支払うようにな！」

「罰金つてちよつと」

「あんだ、知らないのかい」

老婆はもう建国の前まで来ていた。そうしてその皺だらけの顔を顰めさせて彼に問うのだった。見れば別に口が耳まで裂けているわけでもない。ごく普通の小柄な老婆だった。

「ゴミを道に捨てると罰金だよ」

「そうだったの」

実は知らなかった。建国は老婆の言葉に目を大きく見開いた。

「そうだよ。わかつたら払うんだね」

「はい、それじゃあ」

「今度から気を着けるようにね」

「わかりました」

罰金を支払って答える。こうして何が何だかわからないまま話は終わったのだった。

と思つたがまだあつた。老婆はここで建国の格好を見たのだ。闇夜の中だったがそれでもその異様な格好ははっきりとわかるものであつた。

「あんだ、また変な格好してるね」

「そうですかね」

「はっきり言えばそうよ」

中国人らしくはっきり言ってきた。

「何か仏教に道教に？」

「キリスト教もです」

十字架を見せて答えた。

「まあ色々とあります」

「わかつてるよ。あの噂話だよ」

老婆はそう述べてまた笑ってきた。

「ゴミを落としたら化け物がやって来て喰われるって」

「それは嘘だったんですね」

「さて、それはどうかね」

ところが老婆はここで思わせぶりに笑うのだった。その笑みが気にならないというのはこの場合まずないことである。それは建国も同じである。

「実際のところはわからないよ」

「けれどそれは」

「だからわからないものさ」

言葉をはぐらかしてきたのだった。

「誰にもね」

「ですか」

「まあ道にゴミを捨てるのは確かによくないよ」

あまり誰も守らないことであるがその通りである。「この老婆が言うまでもなく。」

「それはわかってるね」

「わかりました」

「わかつたらこれだね。けれど今度ゴミを捨てたら」

「捨てたら」

「わからないよ」

老婆は笑ったがその笑みが実に恐ろしげなものであった。それは少なくとも夜叉に見えるものであった。どうしてそんな笑顔を浮かべることができたのか建国にはわからなかった。だが一つわかったことがある。それは道にゴミを捨ててはいけないということである。化け物が出る出ないは別にして。建国にとってはいい教訓になった話であった。少しばかりの恐怖と共にではあるが。

2
0
7
·
1
1
·
7

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6008d/>

北京の怪物

2010年10月8日15時04分発行